

明治初期への先祖返りか

来年は明治維新から150年である。この欄でもその時代区分にふれたことはあるが、それとは別にこの節目に、さまざまな形の儀式や史実の見直し、あるいは史実の補完が行われるべきであろう。すでに安倍晋三政権も、明治に生きた人々の精神を今後の発展の土台に据える、と何らかの行事を考えていると報じられている。

もっとも安倍首相は山口県出身だから、ひととき強い愛着を持っているのかもしれない。明治150年は長州閥権力をもとにつくられてきたからだ。妙な形のナショナリズムの高揚は問題だと思うが、明治人（とくに庶民）の精神や生活、それに発想法などは一概に否定できない。その前の江戸時代、日本は対外戦争を一回も行わなかったが故の非戦の文化をもっている。戦うべき集団の武士階級は、闘争のエネルギーを文化や倫理に転化せしめた。

もっとも直接の戦闘はなかったにせよ、差別や忠誠心など戦争に伴う徳目を社会生活の中に据えていたのは事実で、戦時の倫理は社会の規範にもなっていた。それが近代日本に継承されたのも事実である。結局、明治150年にあたり、近代日本に積み残しになっている歴史的テーマは何か、改めて検討してみることが必要になろう。私自身は、さしあたり次のようなテーマを検証してみたいと考えている。箇条書きにしてみよう。

(1) 江戸幕府は中央政府で、各藩は連邦を構成する連邦制国家であった。それが近代国家に転じるときの活力になった。

(2) 各連邦（藩）は独自の軍事学、政治観をもっていた。それはなぜ生かされなかったか。

(3) 明治初年代の自由民権運動はいかなる形で解体せざるを得なかったのか。

(4) 近代天皇制に課せられていた役割は、どのような内容か。それはいかなる変化を遂げたか。

(5) 昭和に入ってから軍事主導ファシズムは、明治政府の国策の到達点か、それとも横道にそれと異なる形だったのか。

さしあたりこの5点を検証していこうと考えているのだが、とくに(5)はより具体的に問い直して日本の将来を考えるべきで、私は昭和史を再考するうえでこれがもっとも重要な点だと考えている。

満州事変からまもなくの昭和8（1933）年から、昭和のファシズムは軍事独裁国家として奇妙にゆがんだ形になっている。ドイツ、イタリアのように何らかの理論があって、それに基づいてファシズム化していったのではない。ある意味では日本人はまったく無自覚に、懸命に働いて経済生活を豊かにすれば事足りるとして、極めてストイックにファシズムへの道を歩いたのである。

こうした考えを含んでいる歴史学者・田中惣五郎の論文の検証が大切だと思う。田中は明治・大正・昭和期の史実を調べたうえで次のように書く（「日本ファシズム史」）。

「昭和のファシズムの進み方は）昭和から大正へ、大正から明治へと後退する形である。（略）天皇は明治初年の専制段階にまで引きもどされ、政治機構としてはまだ議会があるかなしかの段階、すなわち明治二十年代にふさわしく、経済的には資本家、地主は（労働者、農民も）軍閥官僚による助成期の明治初年から明治十年代へ、そして思想的には軍人勅諭的、教育勅語的なものの発生した時期まで引きもどされた」

つまり昭和のファシズムは、近代日本のそれぞれの出発点の政策の中に潜んでいたというのである。大正期のデモクラシーや人道主義、そして市民社会の形成は明治期の体制を手直ししつつ、一歩ずつ民主化の道を歩んでいた。ところが軍事独裁は、明治期形成期に進むと予想されたマイナスの道（天皇の神格化や軍事主導體制、そして臣民像など）を一気に走り抜けたのであり、それゆえに昭和は大

正、そして明治の初期に里帰りしたというのだ。

私は前述の（５）に挙げたこのテーマをずっと考えてきた（ちなみに田中のこの書は60年に刊行された）。そして、この論は納得しないまでも参考になると考えている。とくに明治維新時に戻って考えれば、大正から昭和5（30）年ごろまでの道と、昭和6（31）年からの道はまったく異なった結果になるとの論はユニークである。吉田茂・元首相はこの時期を「変調」の期間と言った。私がこの田中の説や吉田の言を再考すべきだと主張するのは、現在の右派系論者による大日本帝国憲法の肯定や軍事主導体制への傾斜、そして市民を臣民へと戻そうとする動きが、平成、昭和後期から昭和のファシズムへ、そして大正期を飛ばして一気に明治初期に戻ろうとする先祖返りだからである。

同じ道を歩む愚を犯してほしくないからである。